まったときよりも、むしろ社会が、……前進している状態にあるときだということは、おそらく一言しがいのあることであろう。社会が停滞的な状態にあるときは、労働貧民の状態は辛く、それが衰退的な状態にあるときはみじめである。実際のところ、進歩的な状態は、社会のさまざまの階級のすべてにとって心から楽しい状態である。停滞的なのは活気に乏しく、衰退的なのは憂うつである[36]」。

このように需要の水準よりもむしろその変化率を強調することは、人口についてのひとつの見方と結びついており、事実また、その見方から出てくるものである。その人口観は、人口は需要と賃金のどのような増大にも追いつく傾向をつねにもっており（「もしこの需要がたえず増大するならば、労働の報酬は必ず結婚と労働者の増大を奨励するに違いない」）、その結果、「働き手の過剰な増大」がこの需要を上まわるようになり、その増大の緩慢化という最初の徴候が現われ、そのために「その〔労働の〕価格を社会の諸事情が要求する適切な率に押し戻す」、と見るものである。そこでこう結論される。「このようにして、人間に対する需要は、他のどんな商品に対する需要とも同じに、必ず人間の生産を規制する。それがあまりにゆっくりと増大するばあいにはそれを速め、それがあまりに速く進みすぎるばあいには、それを押しとどめる[37]」。

利潤について見れば、利潤もまた「社会の富の増大ないしは低下の状態」によって影響を受ける。しかしこのばあいは、〔賃金とは〕逆の受け方になる。「資財の増加は、賃金をひきあげるけれども、利潤をひきさげる傾向がある。多くの富んだ商人の資財が同一事業にふりむけられているばあいには、かれら相互の競争は、自然にその利潤をひきさげる傾向をもち、また同一社会で営まれるあらゆるさまざまの事業の資財が同じように増加するばあいには、この同じ競争が、すべての事業で同じ作用を及ぼすにちがいない[38]」。その結果、たとえ賃金の増大が他のものの価格を上昇させる効果を生むにしても、多くの商品の価格が低下するかもしれない。進歩の過程で利潤率が低下して

いくことについてのこのスミス的な理由づけは、これまた、のちにリカードから批判を受けるテーマでもあった。明らかにリカードは、そのような理由づけを、スミスが（また、それにならってとくにマルサスが）あれほど大きく依拠した需要・供給関係的説明の不適切さをめざましく示している実例だと見たのであった。少なくとも、それが述べられている形式という点からすれば、この結論は、単一の産業で起こる傾向を、全産業というマクロ・レベルにまで、疑わしいやり方で一般化することに基礎を置くものだった。

充用部面の違いによって賃金と利潤が相違すること（すなわち、「自然価格」と両立する相違のことであり、「自然価格」からの乖離を指すのではない）について見れば、彼の扱い方は、けっきょくのところ、有名な純収益均等の理論に帰着する。第十章の冒頭では、次のようにはっきりと、あいまいさを残さずに述べられている。「完全な自由がおこなわれ、そのうえ、自分が適当と思う職業を選ぶことについても、また適当と思うたびごとに職業を変えることについても、あらゆる人が完全に自由な社会では、すくなくとも……労働および資財のさまざまの用途における利益および不利益の全体は、隣接する同一地方では、完全に平等か、または不断に平等化される傾向があるかのいずれかである」。

明らかに、「もし隣接する同一地方に存在するある職業が、自余のものよりも明らかに利益が多いか、またはすくないか、のいずれかであるならば、前者のばあいには多数の人がその職業にむらがるであろうし、また後者のばあいには多数の人がそれをみすててしまうであろうから、その職業の利益はまもなく他のもろもろの職業の水準に復帰するであろう[39]」。賃金と利潤にはなおたえず不均等さが残る傾向があるけれども、以上の結果として、その不均等さは、金銭的な利得以外の面で存在する利益と不利益との収支の差異をちょうど償うだけの分にすぎなくなるだろう。